

佐々木

季は	地は	ツレ	ツレ
雜	前は鎌倉	シテ	源頼朝
	後は駿河	ツレ トモ	佐々木高綱 梶原景季 景季従者

「いかに佐々木。木曾が狼藉鎮めんたぬ。皆西国に

さし遣はしてあるに。何とて高綱は後れて有るぞ。

「仰せ畏つて承り候。唯今出仕申す事余の儀にあらず。あの一つほう立つたる生食の所望にて出仕して候。

「生食が事は昨日梶原来り。源太を乗すべき馬なけ

ればとて。頗りに乞ひ候ひつれども。梶原にさへ出ださぬ馬なれば。まして高綱には思ひもよらぬ

事にて有るぞ。

「さては梶原にさへ下されぬ御馬なれば。まして高綱には下さるまじきとや。いで梶原には諸事の別當を仰せ付けられ。かほどの分限の者さへ御馬を申す。まして身不肖の高綱が御馬申したらんは。やは僻事にては候。今更かかる奉公だて。畏れ多く候へども。さても我君流人の御身とならせ給ひ。

伊豆の国蛭が小島に御座ありし時。某も十四の年

より御配所の御供申し。又其後石橋山の合戦に。
院宣を御忘れ給ひしを。某一人かけもどり。大勢
に割つて入り。院宣を給はつて。二度君の御用に
立て申し。やは御意のよき梶原。かほどの奉公を
ば申し候。他の非を申せば身のあやまり。御馬の
ほしきは余の儀にあらず。江州は佐々木が故郷な
れば。定めて宇治勢田の案内者仰せ付けらるべし。
さあらん時は疲馬に乗り。底の水屑とならんも口
惜しく。又ふる傍輩の申さんは。いかなる御馬な
ればとて。一命を参らせ置き侍る。一疋を惜しみ
給ふと申さんは。かつうは君の御難にもなるべし。
あつぱれ御門出にて候はずは。御前にて腹十文字
に搔き切り。某はあるの宇治瀬田よりも猶恐ろしき。
死出三途の大河をも。などかは渡し申さざらんと。
「無念の余りに覚えず落ちる。涙を抑へて御前を立
つ。恥かしの後姿や。と思ひながらも又出でゝ。

シテ
「一度君に見えばやと。

シテ
「ひそかに口説くと思へども。思ひ余りて言ふ声の。

シテ
「いかに佐々木。

シテ
「御前に候。

頼朝
「源太に逢ひては心得よ。はやく生食取らするぞ。
地
「御諱の下に高綱は。彼生食を牽かせつゝ。勇む心
は有りながら。かくて恨みを春駒の。勇みをなし
て上りけり。／＼。（申入）

源太一声
「さても源太は磨墨を牽かせ。小高き処に駒駆け上
げ。前後を遙に見渡せども。磨墨にます馬無けれ
ば。心も空に浮島が原。名をも揚ぐべき富士おろ
し。

シテ
「高綱も生食を牽かせて。さも静々と登路の。

地
「足柄箱根明けぬに早越え。海山二つ夜を日に。駿
河の浮島が原に。先立つ勢にぞ追ひ付きたる。
源太
「いかに誰かある。

トモ 「御前に候。」

源太 「唯今の声は正しく生食が嘶声なり。いかやうの者の賜はりたるぞ尋ねて來り候へ。」

トモ 「畏つて候。いかに申し候。唯今のいばひ声は生食がいばひ声にてあるが。いかやうの人の賜はりてて候ふぞ。」

シテ 「佐々木が賜はりて候。」

トモ 「尋ね申して候へば。佐々木殿の御賜はりと申し候。」

源太 「佐々木名字も数多有るべし。いづれの佐々木が賜はつたると重ねて尋ね候へ。」

トモ 「畏つて候。佐々木名字も数多あるべし。何の佐々木殿の御賜はりにて候ふぞ。」

シテ 「佐々木の四郎高綱が賜はりたりと申せ。ちとも苦しかるまじきぞ。」

トモ 「佐々木の四郎高綱の御賜はりにて候。」

源太 「佐々木にあひて物一言いはん其分心得候へ。いかに

佐々木殿。

シテ「源太殿か珍しう候。」

源太「あら羨ましの生食や候。」

シテ「あゝ慾がましや。生食にましたる磨墨は候。」

源太「いや全其馬ほしきにあらず候。昨日親にて候ふ者我君に参り。御馬の事を申し上ぐるに賜はらず。」

面目を失ひ罷り帰り候ふに。佐々木殿の御賜はりは。にくい君の御聴負候ふな。日頃の遺恨なけれども。君を恨むる子細あり。汝と爰にて刺し違へ。郎等二人失ひて。

地「君に損取らせ奉りて。思ひ知らせ申すと。手綱かいとり駆け合はす。」

シテ「あふ伊豆箱根弓矢八幡も御照覧あれ。此馬は賜はらず。盜みたる馬にてあるぞ。先づ静まつて事を聞き給へ。あゝ早まつたる男かな。」

源太「さて子細はいかに。」

「昨日某君に参り。御馬の事を申す処に賜はらず。

面目を失ひ罷り帰りしに。折節御馬屋を見てあれば。かひぐしき番の者も無く。唯生食が舍人ばかりなり。某兎角の事をば言はず。腰の刀を抜いて取らせ。此馬を盗みてくれよ。此度江州に討つて上り。高名極むるならば。汝をば高恩に誇らすべしと言ひければ。下駄の身の悲しさは。慾にめでけるか。又其際兎角辞しなば悪しかりなんとや思ひけん。子細あらじと領掌す。即ち八幡の御引合せと有難く思ひ。其まゝそこにて日を暮らし。思ひのまゝに盜み馬の。追手もこそは有るらんと。いさ白波の盜人を。駿河の海や浮島が原。今や景季。此上は君に科はなし。何の恨みも夏引の。糸を乱すや山の富士。打ちつれてこそ上りけれ。

シテ
「嬉しやな高綱は。

地「もとめたる命生食に。磨墨を牽きつれて上りけり

や。

「さる程に是ぞ名残の酒宴かなと。佐々木梶原に諫められて。皆々馬を打ち寄せて。

源太 「おり立つや。田子の浦波富士おろし。

地 「靡かぬ事もなかりけり。 (男舞)

地 「さる程に鳥が鳴く。東の大勢攻め上れば。木曾が一党。三島高梨都を巽。宇治瀬田二つの橋を隔てゝ。

シテ 「渡さん様こそ渚に乱杭。

地 「底に大綱。波の隙行く駒の足に。流れかかるを綱切の剣は。云ふ名も高綱が勢ひ。誉めぬ人こそ無かりけれ。